

弔いの世界

大切な人が亡くなった時、何をすれば良いのでしょうか。納棺、通夜、葬儀、出棺、納骨、法要など行事も様々。きちんとした弔いは、故人のやすらかな眠りにつながることでしょう。臨終から納棺までをご紹介します。

◆臨終をつげられたら「末期(まつご)の水」

医者から臨終を告げられたら、末期の水をとります。「死に水」とも呼ばれ、本来は臨終前に死に臨んでいる人の口に水を含ませてやり、のどの渇きをいやすものだとされています。末期(まつご)の水は、配偶者から始め、故人と血のつながりの濃い近親者の順に行ないます。新しい筆か、割り箸に脱脂綿を白糸でくくりつけたものなどに、茶碗の水を含ませ、軽く唇に当てます。

◆死装束は故人の冥福への旅支度

遺体を納棺するとき、死装束といわれる白木綿の経帷子(きょうかたびら)、手甲(てっこう)、脚絆(きゃはん)、足袋、頭陀袋(ずだぶくろ)と六文銭などを用意します。六文銭は故人が三途の川を渡る際に支払う渡し賃とされていました。その他、出棺間際に旅の途中の食事として枕飯や枕だんごを入れてあげる習慣もあります。

◆聞きなれない湯灌(ゆかん)とは

遺体を清める湯灌。現在では、病院等でアルコールでふき清めることが一般的な解釈になっていますが、本来は字のごとく、たらいなどに灌(そそ)いだ湯を使って遺体を洗うことを意味しました。その際使われるぬるま湯は「逆さ水」といわれ、先に入れた水にあとから湯をつぎ足したものです。

◆遺体の向きはなぜ北枕なのか

北枕の習慣はお釈迦さまが、迷いや執着を断ち切り、束縛や輪廻から解き放たれた最高の境地「涅槃(ねはん)」に入られたときの「頭北面西右脇臥(ずほくめんさいうきょうが)」に習うものとされています。つまり、頭を北に、顔を西に、向きを右横に臥すという姿勢です。仏式では遺体は北枕にして寝かせ、胸元で合掌させた手に数珠を持たせて、顔は白い布でおおいます。枕元には白木の台に枕飾りをして僧侶を迎え枕経をあげてもらいます。

◆臨終から法要まで

危篤・臨終

- ・末期の水
- ・湯灌
- ・死装束

通知

- ・死亡通知
- ・死亡届
- ・近所へのあいさつ

通夜・葬儀準備

- ・葬儀準備
- ・神棚封じ
- ・喪主・世話役の決定

枕づとめ・納棺

- ・枕飾り
- ・枕経
- ・戒名
- ・納棺

通夜

- ・読経
- ・通夜ぶるまい

葬儀・告別式

- ・喪主あいさつ

出棺

- ・別れ花

火葬

- ・納めの式
- ・骨上げ
- ・遺骨迎え
- ・精進落とし

葬儀後

- ・あいさつまわり
- ・香典返し
- ・形見分け

納骨

- ・納骨
- ・墓地、墓石

葬のQ&A

Q. 遺言を作成していない場合、急遽、臨終前にカセットテープに本人の声を残せば遺言とみなされるのでしょうか？

A. 本人から近親者などに口頭で伝えられたり、テープレコーダーに吹き込まれた遺言は法的には無効となります。